

## 病害虫発生予察注意報第5号

### 佐賀県

タマネギべと病の越年罹病株の発生が県内各地で認められており、今週末の降雨後に分生孢子が飛散し二次伝染が起こることが考えられます。3月上旬に伝染が起これば、平成28年産のような被害を生じる恐れがあるため、「**越年罹病株の抜取り**」を継続するとともに、防除体系（図1）を参考に**直ちに「3月上旬のジマンダイセン水和剤による薬剤防除」を実施してください。**

作物名：タマネギ（早生及び中晩生品種）

病害虫名：べと病

#### 1 注意報の内容

発生地域：県内全域

予想される発生量：平年より多い

#### 2 注意報発令の根拠

##### 1) 現地ほ場での発生状況

(1) マルチ栽培早生タマネギを対象に越年罹病株の発生状況を調査した結果（平成30年2月28日、25ほ場）、県内各地で発生が認められたものの（写真1）、発生ほ場率は24.0%（前年同時期：45.5%、平成28年同時期：58.3%）であった。また、発生株率は0.06%（前年同時期：0.12%、平成28年同時期：0.92%）で、前年及び多発生した28年産よりやや少～少なかった（表1）。

(2) 露地栽培中晩生タマネギについても同様に調査した結果（同日、5ほ場）、発生ほ場率は20.0%（前年同時期：33.3%、平成28年同時期：62.5%）であった。また、発生株率は0.002%（前年同時期：0.12%、平成28年同時期：0.28%）で、前年および多発生した28年産よりやや少なかった（表2）。なお、別の露地栽培早生タマネギの一部ほ場では、越年罹病株上に分生孢子の形成が認められたところがある（写真2）。

##### 2) 農業試験研究センター内試験ほ場（佐賀市川副町）での発生状況

越年罹病株の発生は、マルチ栽培早生品種及び露地栽培中生品種とも2月26日以降に増加している。

##### 3) 越年罹病株内における菌糸の観察

大半の越年罹病株では分生孢子の形成を認めていないが、黄化した葉身の組織内にべと病菌の菌糸の生育が認められ、分生孢子の形成能力があると考えられる（写真3、4）。

##### 4) 平成28年産の発生経過と今後の発生予想

本病により甚大な被害を受けた平成28年産では、越年罹病株の多発生に加え、3月上旬がべと病の発生に好適な気象となり、早期から二次伝染が起こったことが大発生につながったと考えられる。

気象庁による今後の佐賀県の週間天気予報（3月1日11時発表）によれば、3月3日（土）～5日（月）の天候は降雨で、最低気温は10℃程度と予想され、べと病の伝染に好適な条件となる可能性が高く、平成28年産と同じように3月上旬に二次伝染が起こる恐れがある。

これらのことから、3月中の越年罹病株からの二次伝染を抑えるため、以下の防除対策を確実に実施する必要がある。

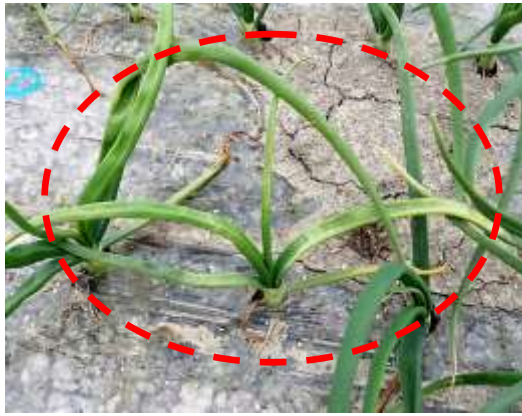


写真1 マルチ栽培早生タマネギに発生した越冬罹病株  
(平成30年2月28日)



写真2 分生胞子が形成された露地栽培早生タマネギでの越冬罹病株  
(平成30年2月27日)



写真3 越冬罹病株の黄化した発病葉  
(平成30年2月28日)



写真4 黄化した葉の組織内におけるべと病菌の菌糸  
(平成30年2月28日)

表1 マルチ栽培早生品種におけるタマネギべと病の発生状況  
(農業技術防除センター、上場営農センター、平成30年2月28日調査)

地区名 ほ場番号	A地区								B地区				
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m
発生株率(%)	0.10	0	0.20	0	0.75	0.25	0.10	0	0	0	0	0	0
各ほ場2,000株調査 平成28年産、29年産は3月2日に調査 同時期の過去10年のデータがないため平均値はない	C地区										D地区		
	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	
	0	0	0	0	0	0	0	0	0.10	0	0	0	
		発生ほ場率(%)		平均発生株率(%)									
		本年産		24.0		0.06							
		29年産		45.5		0.12							
		28年産		58.3		0.92							

表2 露地栽培中晩生品種におけるタマネギべと病の発生状況  
(農業技術防除センター、平成30年2月28日調査)

地区名 ほ場番号	A地区		B地区		D地区		発生ほ場率(%)	平均発生株率(%)	
	e	a	b	c	d				
発生株率(%)	0.01	0	0	0	0	本年産	20.0	0.002	
各ほ場2,000~10,000株調査							29年産	33.3	0.12
平成28年産、29年産は3月2日調査							28年産	62.5	0.28
同時期の過去10年のデータがないため平均値はない									

### 3 防除上注意すべき事項

#### 1) 越年罹病株の抜き取り徹底

各ほ場において発生状況を必ず観察し、**越年罹病株を認めた場合には直ちに抜き取りを行う**。抜き取った株は放置せず適切に処分する。

#### 2) 薬剤防除の徹底

二次伝染による感染の拡大を防ぐため、以下のとおり薬剤防除を徹底する（図1）。

##### 【早生品種】

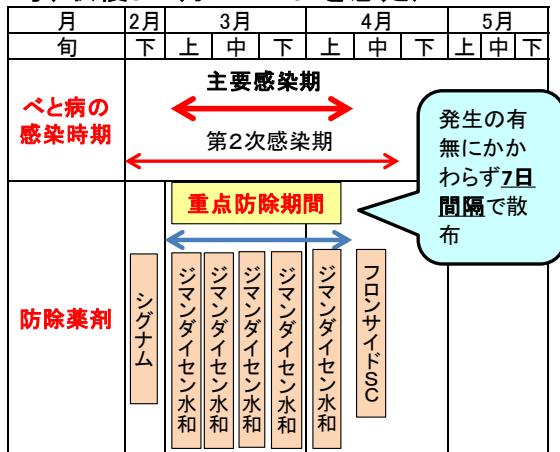
現在実施中のマンゼブ剤（ジマンダイセン水和剤）を核とした10日間隔の防除を4月下旬まで継続する。特に、**3月3～5日の感染を防ぐため、直ちに3月上旬の薬剤防除を行う**。なお、鱗茎肥大期のタマネギは本病にかかりやすいため、重点防除期間である3月上旬～4月上旬は、散布間隔を7日に短縮して防除を徹底する。

##### 【中晩生品種】

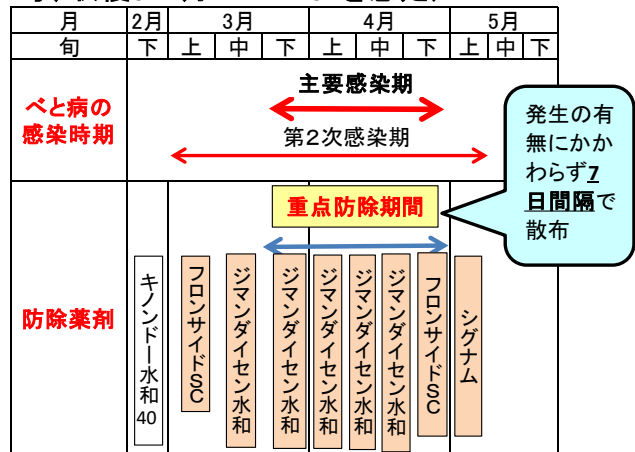
現在実施中のマンゼブ剤（ジマンダイセン水和剤）を核とした10日間隔の防除を5月上旬まで継続する。特に、**3月3～5日の感染を防ぐため、直ちに3月上旬の薬剤防除を行う**。なお、重点防除期間である3月下旬～4月下旬は、散布間隔を7日に短縮して防除を徹底する。

図1 タマネギべと病の発生と本病を主体とした防除体系(例)

早生タマネギ（露地栽培、定植日11月中・下旬、収穫日5月5～10日を想定）



中生・晩生タマネギ（露地栽培、定植日11月下旬、収穫日5月22～30日を想定）



##### 【共通】

薬剤はかけむらがないよう十分量を散布する。

降雨等により圃場条件が悪く乗用管理機で防除できない場合には、動力噴霧器による手散布で対応する。

#### (3) 農薬使用基準の遵守

薬剤防除に当たっては、農薬使用基準（収穫前日数、総使用回数等）を遵守する。

#### (4) 地域全体で防除対策を実施

早期に発生したべと病が、周辺のタマネギの感染源となるため、地域全体で防除対策に取り組む。

#### (5) 排水対策の徹底

圃場内に雨水が停滞すると、本病が発生しやすくなるので、土入れや溝切り等の排水対策を徹底する。

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部  
〒840-2205 佐賀市川副町南里1088  
TEL (0952)45-8153 FAX (0952)45-5085